

報 告

父親となる発達過程における
「自由の制限」と親役割意識西尾 敏¹⁾, 中津 郁子²⁾

〔論文要旨〕

質問紙調査により、父親となる発達過程における「自由の制限」が親役割意識の形成にどのように影響しているかを検討した。約半数の回答者が「自由の制限」を感じていた。因子分析の結果では、父親となる発達尺度では『過去と未来の展望』、『責任感』、『自由の制限』、『父親としての自信』の4因子が抽出された。夫婦関係満足度尺度では『親密さ』、『頑固さ』の2因子が抽出され、職場環境尺度は『労働環境』の1因子、父親の育児参加尺度は『育児参加』の1因子が抽出された。『自由の制限』因子高低群と他因子との関係を検討した結果では、すべての因子において有意差が見られた。父親の自由の制限はネガティブな側面だけでなく、親になることによる発達を支える一要因であることが考察された。

Key words : 父親, 自由の制限, 制約感, 親役割意識, ポジティブな側面

I. はじめに

父親発達に関する研究の多くは、父親の子育て参加が配偶者や子どもの成長に与える影響についてであり、男性が父親となる心理的变化や父性意識の形成といった父親発達に焦点を当てた研究は未だ少ない。

Erikson は、成人期の心理社会的危機を「生殖性対停滞性」とした¹⁾。男性が女性と結婚し、女性の妊娠や出産によって生物学的に子どもの親となるのは、まさにこの「生殖性対停滞性」という発達段階を乗り越えようとする時期である。しかし、生理的体験を持たず、間接的に体験している男性では、父親として自分のアイデンティティを統合していくことは、女性の場合よりもはるかに困難なことであり得ると考えられる。

父親意識に関する研究で注目するのは、父親が子どもの誕生や子育てにより感じている制約感や自己抑制

といった父親意識形成の過程に見られる否定的感情である。父親になることは、大きな喜びであると同時に物理的・経済的・精神的に負担が増すことでもある。小野寺・青木・小山の研究では夫が経済的、精神的に一家を支えていく負担感や家事の手伝いの負担や自分の行動が制限されるなどを「制約感」とした。そして、「制約感」が強い男性は、まもなく父親になる実感や喜びが希薄で親になる自信が低いこと、その制約感の強弱は父親になる心の準備ができていのかどうかに関わることを指摘している²⁾。また森下は「自由の喪失」という考えを取り上げ、趣味や新しいこと、自分がやりたいことを始める意欲がなくなった、無駄遣いができなくなったなど子どもができて自分の自由な時間が持てなくなった父親の心情を捉えている³⁾。しかし、親になることによる自由の制限や喪失は否定的な意識の側面だけでなく、親役割意識の向上といった肯定的

“Restriction of Freedom” and Awareness of Parental Roles in the Development Process of Becoming a Father
Satoshi NISIO, Ikuko NAKATSU

[2253]

受付 10. 7. 7

採用 11. 9. 8

1) 高知県の町教育委員会 (スクールソーシャルワーカー)

2) 国立大学法人鳴門教育大学大学院人間教育専攻臨床心理士養成コース (研究職)

別刷請求先: 西尾 敏 高知県の町教育委員会 〒781-2110 高知県吾川郡いの町3597

Tel: 088-893-1922 Fax: 088-893-2121

な側面も有している^{3,4)}。父親発達を促す新たな一面として今後も追及すべきであると考え。

そこで、本研究では質問紙調査により、父親が夫婦関係や子育てへの参加、職場環境からの影響を受けながら親として発達していく心理的要因を検討した。そして、男性が父親になる発達過程で抱くと考えられる経済的・時間的・心理的意識としての「自由の制限」が父親発達に及ぼす影響について検討した。

II. 研究方法

1. 研究対象および期間

A県・B県・C県の保育園・学童保育所・小学校など計7施設に乳幼児や児童を通わせる父親を対象とした。233人より有効回答を得た(回収率54.4%)。調査期間は2009年6月から7月であった。

2. 調査内容および方法

先行研究を参考にして^{2,3,5~7)}父親となる発達尺度28項目、夫婦関係満足度尺度21項目、職場環境尺度8項目、父親の育児参加尺度7項目の合計64項目から構成される質問紙を作成した。作成した質問紙は、直接各所に持参し配布を依頼し、後日再訪して回収した。倫理的配慮として、各施設長の了承を得たうえで配布した。また、依頼書に研究目的とプライバシー保持を明記し、質問紙は無記名とし、父親不在の場合は廃棄ないしは無記入で返却していただくよう依頼した。データの集計と解析についてはSPSS16.0J for Windowsを使用し、有意水準は5%とした。

III. 結果

1. 対象者の属性

対象者の年齢は30歳代が127名(54.6%)と最も多く、世帯数は4人家族(115名:49.6%)、子どもの人数は2名(55.6%)が最も多かった。

2. 父親となる発達尺度

1) 各項目の回答傾向

対象者の持つ趣味の有無に関しては、「子どもが生まれる前に夢中になれる趣味を持っていた」と回答する対象者が4(やや当てはまる)や5(当てはまる)を合わせると(以下「当てはまる」と記載)、139名(59.7%)だった。そして、「欲しいものを我慢(138名:59.2%)」、「経済的・時間的な余裕のなさ(130名:

55.8%)」、「節約するようになった(128名:55.0%)」について、約半数が「当てはまる」と回答していた。また、「自分の時間を楽しむことができる」に111名(47.6%)の対象者が「当てはまる」と回答し、「趣味に没頭できない(103名:44.2%)」、「生活に圧迫感がある(99名:42.5%)」について1(当てはまらない)や2(やや当てはまらない)、(以下「当てはまらない」と記載)と回答していた。「子どもの誕生を考えると嬉しい」には(210名:90.2%)の父親が「当てはまる」とし、「親からどのように育てられたかを考える(177名:76.0%)」、「子どもをどう育てるかを考える(176名:75.5%)」、「子どもの頃を思い出す(133名:57.1%)」、「過去の親子関係を思い出し、将来の子どもとの関わりを考える(132名:56.7%)」、「理想の親子関係を想像する(119名:51.1%)」について、多くの対象者が「当てはまる」と回答していた。また、「良い父親になれる(127名:54.5%)」、「父親に向いている(120名:51.5%)」、「育児を楽しむ自分を想像(106名:45.5%)」について、約半数の対象者が「当てはまる」と回答していた。「子どものために努力する(199名:85.4%)」、「子育てによる父親意識の強まり(174名:74.7%)」、「一家を支えていく(123名:52.8%)」、「将来のために考えて行動する(121名:51.9%)」についても、多くの対象者が「当てはまる」と回答していた。

2) 因子分析

28項目について主因子解析を求め、因子分析を行った。バリマックス回転を行ったところ、固有値1.0以上の5因子が抽出された。因子負荷量が0.40以上の項目を採用し、2つの因子にまたがって同程度の高い負荷を示した項目を除いて再度分析を行ったところ、抽出された4因子で全分散のおよそ56%が説明された。その結果、18項目が父親になることによる発達の要因として採択された。表1のように、第1因子は『過去と未来の展望』7項目($\alpha=0.790$)、第2因子は『責任感』5項目($\alpha=0.771$)、第3因子は『自由の制限』4項目($\alpha=0.714$)、第4因子は『父親としての自信』2項目($\alpha=0.830$)と解釈された。4因子の α 係数は各因子とも比較的高い信頼性が示され、尺度全体の α 係数も0.830と比較的高い信頼性が示された。

表1 父親になることによる発達尺度の因子分析

因子名および質問項目	F 1	F 2	F 3	F 4	共通性
<第1因子：過去と未来の展望>					
23. 自分と親との関わりを思い出し将来の自分と子どもとの関わりを想像するようになった	.701	.279	.059	-.014	.573
13. 自分の親が自分をどのように育ててくれたかを考えるようになった	.620	.083	-.090	-.150	.399
33. 自分が子どもの頃を思い出すようになった	.611	.094	-.012	.012	.382
36. 将来の自分を想像するようになった	.493	.264	-.111	.073	.331
52. 自分の子どもとの理想の親子関係を想像するようになった	.489	.373	.213	.331	.533
29. 家族と話をする自分を想像する	.479	.141	.134	.179	.300
14. 育児を楽しんでいる自分を想像する	.477	.111	.078	.280	.324
<第2因子：責任感>					
49. 子どもを育てることを通して父親としての意識が強くなった	.387	.627	.000	.190	.579
41. 子どもを育てるためにできるだけ努力したい	.133	.600	.024	.097	.388
45. 自分の子どもをどのように育てたいかを考えるようになった	.315	.593	.141	.184	.506
40. 将来のことに関心が増し、考えて行動するようになった	.315	.579	.024	.162	.461
48. 一家を支えていくのは自分しかいないと強く感じる	.015	.502	.065	.128	.273
<第3因子：自由の制限>					
6. 子どもが生まれてから趣味に費やす経済的・時間的な余裕がなくなった	.017	.107	.720	.017	.531
31. ゆったりとした時間や一人の時間を持てなくなった	-.078	.063	.685	.006	.480
17. 子どものことを考えると趣味に没頭できない	.319	-.031	.593	.027	.455
20. 自分の時間を自由に楽しむことができない	-.061	.028	.491	-.107	.257
<第4因子：父親としての自信>					
4. 良い父親になれると思う	.070	.283	-.101	.784	.711
9. 自分は父親に向いていると感じる	.141	.277	-.073	.749	.663
因子寄与率 (%)	2.69	2.20	1.72	1.54	
累積寄与率 (%)	14.95	12.23	9.54	8.53	

3. 夫婦関係満足度尺度

1) 各項目の回答傾向

「和気あいあいとした仲である (181名: 78.1%)」, 「妻がいないと寂しい (181名: 78.1%)」, 「一緒になって喜ぶ (180名: 77.2%)」, 「妻の相談にのる (180名: 77.2%)」, 「妻から受け入れられている (147名: 63.1%)」, 「妻から頼りにされている (137名: 58.8%)」, 「何でも些細な会話をする (130名: 55.7%)」, 「夫役割への理解と評価 (128名: 54.9%)」について, 多くの対象者が「当てはまる」と回答していた。

2) 因子分析

上記と同様因子分析を行った結果, 17項目が夫婦関係に対する満足度の要因として採択された。表2に示すように, 第1因子は『親密さ』15項目 ($\alpha = 0.882$), 第2因子は『頑固さ』2項目 ($\alpha = 0.736$)と解釈された。

各因子とも比較的高い信頼性が示され, 尺度全体の α 係数は0.826と比較的高い信頼性が示された。

4. 職場環境尺度

1) 各項目の回答傾向

「休暇をとりやすい (139名: 59.6%)」, 「家庭事情に対する理解 (133名: 57.1%)」, 「家族の話をする雰囲気がある (130名: 55.8%)」, 「仕事にも張りが出る (124名: 53.2%)」について, 半数の対象者が「当てはまる」と回答していた。

2) 因子分析

上記と同様, 因子分析を行ったが, 共通性が1.0を超えたため因子が抽出されなかった。そこで, 8項目すべてを第1因子としてまとめ『労働環境』 ($\alpha = 0.712$)と解釈された。やや高い信頼性が示された。また, 尺度全体の α 係数は0.712とやや高い信頼性が示された。

5. 父親の育児参加尺度

1) 各項目の回答傾向

「子どもと話をする (215名: 92.3%)」, 「子どもと一緒に風呂に入る (197名: 84.6%)」, 「子どもと一緒に食事をする (196名: 84.2%)」, 「子どもと一緒に遊ぶ (193名: 78.6%)」, 「夫婦で育児方針を考える (153名: 65.6%)」について, 多くの対象者が「当てはまる」と回答していた。

表2 夫婦関係満足度尺度の因子分析

因子名および質問項目	F 1	F 2	共通性
<第1因子：親密さ>			
42. 妻から受け入れられていると感じる	.802	-.113	.655
1. 妻とは和気あいあいとした仲である	.766	-.088	.594
24. 私は妻から頼りにされている	.733	-.006	.538
35. 妻は私の夫としての役割を理解し評価してくれる	.725	-.059	.529
7. 夫婦で一緒になって喜ぶ	.706	-.970	.509
53. 夫婦で何でも些細な会話をする	.699	-.206	.532
15. 妻の悩みの相談にのる	.696	-.252	.548
16. 妻に自分の悩みを相談する	.636	-.144	.425
54. 妻は私の子育てに対して満足している	.613	-.066	.380
2. 妻と私は友だちのような夫婦である	.571	-.097	.335
11. 夫婦で一緒になって悲しむ	.553	.004	.306
27. 妻がいないと寂しい	.541	-.092	.301
10. 妻は自分の育児に対して否定的であると感じる	-.502	-.186	.287
47. 妻は私が子どもをしっかり躱けていると思っている	.466	-.010	.217
19. 私は妻と距離を置いて接している	-.403	.310	.258
<第2因子：頑固さ>			
34. 私は妻に頑固になってしまう	-.042	.834	.697
30. 私は妻の失敗や過ちに厳しい	-.066	.683	.471
因子寄与率 (%)	6.11	1.47	
累積寄与率 (%)	35.92	8.67	

2) 因子分析

上記と同様7項目に関して因子分析を行ったところ、1因子のみ抽出された。表3に示すように『育児参加』($\alpha = 0.634$)と解釈された。尺度全体の α 係数は0.656と、やや信頼性が低いことが示されたが、そのまま採用することとした。

6. 因子間相関の検討

抽出された計8因子がどのように関係しているのかを検討するため、8因子について Pearson の積率相関係数を求めた。表4のような結果が見られた。『自由の制限』は『親密さ』以外の6因子とかなり強い正の相関が見られた。

表3 父親の育児参加尺度の因子分析

因子名および質問項目	F 1	共通性
<第1因子：育児参加>		
5. 子どもと一緒に遊ぶ	.740	.548
12. 子どもと話をする	.588	.346
44. 子どもの育て方について身近な人たち(職場や近所の人など)と話す	.458	.210
39. 育児方針について夫婦で話し合う	.433	.187
32. 子どもと一緒にお風呂に入る	.421	.178
因子寄与率 (%)	1.47	
累積寄与率 (%)	29.37	

表4 8因子間の相関

因子項目	育児参加	労働環境	過去と未来の展望	責任感	自由の制限	父親としての自信	親密さ	頑固さ
育児参加	—	.432**	.410**	.466**	.759**	.625**	.016	.625**
労働環境		—	.258	.353	.682**	.522**	.260	.522**
過去と未来の展望			—	.534**	.753**	.663**	.260	.522**
責任感				—	.789**	.960**	.266	.960**
自由の制限					—	.929**	.275	.929**
父親としての自信						—	.285	1.000**
親密さ							—	.285
頑固さ								—

** p < .01

7. 『自由の制限』高低群と他因子との関係

父親となる発達尺度の『自由の制限』因子を得点化した後、個人の総合得点を求めて平均点を算出した。そして、その平均点を降順に並べて3群に分け、『自由の制限』因子の平均点が高いものを高群に、『自由の制限』因子の平均点が低いものを低群とした。また、同様に他の7因子の平均点も算出し、『自由の制限』因子の高低群で他の7因子の平均点に差異がみられるかt検定を行った。高群および低群の人数は各78人であった。その結果、表5に示すように、『自由の制限』高群は低群に比べて7因子すべてにおいて有意差が見られた。

IV. 考 察

1. 各尺度への回答傾向から

父親となる発達尺度に関しては、半数の対象者が子どもの誕生によって、趣味にかける経済的・時間的な余裕を失うといった「自由の制限」を感じており、子どもを育てるために欲しいものを我慢したり、節約したりしていた。また、ほぼ半数の対象者は子どもの誕生により、自分の時間を全く失うことはなく、可能な限りで趣味を楽しんでいた。子どもが生まれる前後の意識に関しては、ほとんどの父親が子どもの誕生を嬉しいと感じていた。そして、半数以上の対象者が、子どもを育てる中で自身の子どもの頃や両親との親子関係といった過去を振り返ると同時に、子どもの育て方や理想の親子関係といった将来に目を向けていることがわかった。また、多くの対象者は、父親となったことで責任感を抱き、将来のことを考えて行動するよう

になっていた。自由の制限は感じつつも父親として行動している人が多いと考察される。

夫婦関係に関しては、多くの対象者が妻からの心理的サポートを得ることができており、妻との夫婦関係に肯定的感情を抱いていると同時に、対象者も妻の相談にのるなどの心理的サポートを施していることがわかる。職場環境に関しては、約半数の対象者が職場環境に対して家庭や子育てへの理解や家族の話をする雰囲気があると感じており、またそれが影響して仕事への意欲も増していることがわかる。父親の育児参加では、石川⁸⁾の研究同様に本研究でも多くの対象者が子どもと一緒に遊んだり、食事やお風呂を共にしたりなど、子どもとの触れ合いの時間を大切にしていることがわかる。

2. 「自由の制限」が父親発達に及ぼす影響

『自由の制限』因子は『親密さ』以外の6因子とかなり強い正の相関が見られ、『自由の制限』因子の高低群と他因子との関係では、「自由の制限」を高く感じている対象者の方がそうでない対象者より7因子の平均点が高いことが明らかとなった。つまり、育児参加や夫婦関係、労働環境等で充実している人ほど「自由の制限」を強く感じているかもしれないと考えられた。子どもが生まれ、家族のための時間が増えると個人の自由が少なくなるのは必然的なことかもしれないが、自由の制限のポジティブな側面とも言えないだろうか。先行研究では、制約感や自己抑制などをはじめとする「自由の制限」が父親発達に関する要因に与えるポジティブな影響については明らかとされていない

表5 <自由の制限>因子高低群と他因子との関係

尺度および因子名	自由の制限 (低群)		自由の制限 (高群)		t 値
	平均	SD	平均	SD	
<父親になることによる発達尺度>					
過去と未来の展望因子	2.844	.686	4.126	.534	13.027***
責任感因子	3.223	.726	4.369	.396	12.242***
父親としての自信因子	3.149	.525	4.289	.283	16.862***
<夫婦関係満足度尺度>					
親密さ因子	3.469	1.010	3.852	.680	2.777**
頑固さ因子	3.150	.525	4.289	.283	16.862***
<育児参加尺度>					
育児参加因子	3.349	.599	4.454	.392	13.636***
<職場環境尺度>					
労働環境因子	2.889	.694	3.888	.583	9.728***

** p < .01 *** p < .001

い^{2-4,8-11)}。どちらかと言えば、ネガティブな影響を与える要因として捉えられてきた傾向がある。小野寺らの研究では、「まもなく親になる男性」を対象としているが、制約感の強い男性には子どもとうまく関われないと考える傾向があった。さらに父親としての自信が低いことなどが述べられている²⁾。本研究の結果とは多少異なるが、これは本研究の対象者が実際に子どもを持って数年の父親を対象としていることが関係しているかもしれない。子どもの誕生により、個人の自由に使用できる時間的・経済的な余裕を失ったことで、一個人としての自己実現の道は妨げられるかもしれない。だが、子どもが生まれ、父親としての自分や社会に関わる自分が大きくなることで、子どもや家族への愛情を抱き、彼らを養っていこうとする責任感が芽生えたと考えられる¹²⁾。それにより、子育てや仕事により一層の意欲を持って取り組むことができ、父親となる発達を成し遂げることができるのではないだろうか。森下は「自由の喪失感は、親になることによる発達のひとつの側面である」ことを指摘している³⁾。本研究の「自由の制限」も同様に、親になることによる発達を支える一要因とも考えられることが考察された。

V. ま と め

本研究では質問紙調査により、父親となる発達過程における経済的・時間的・心理的な意識としての「自由の制限」が親役割意識の形成にどのように影響しているかを検討した。その結果、回答者のほとんどが子どもの誕生を嬉しいと感じていた。そして、約半数が「自由の制限」を感じていた。また約半数は子どもの誕生によって自分の時間を失うことはなく趣味を楽しんでいることがわかった。『自由の制限』因子と他因子との関係では、夫婦関係の『親密さ』以外の6因子とかなり強い正の相関が見られた。また『自由の制限』因子高低群と他因子との関係では、すべての因子に有意差が見られた。父親になる発達過程や夫婦関係への満足感、育児参加、さらには労働環境に関する充実感の高まりを感じている人ほど、「自由の制限」を強く感じていると考えられた。「自由の制限」はネガティブな側面のみでなく、親になることによる発達を支える一要因であるとも言えることが考察された。

今回質問紙に回答してくださった方は、積極的に子育てに参加している方が多かったと考えられた。対象

者を広げながら、今後は個別の質的な検討も含めて研究をしていく必要がある。

文 献

- 1) Erikson EH. 自我同一性 (小此木啓吾, 訳編). 誠信書房. 1973.
- 2) 小野寺敦子, 青木紀久代, 小山真弓. 父親になる意識の形成過程. 発達心理学研究 1998; 9 (2): 121-130.
- 3) 森下葉子. 父親になることによる発達とそれに関わる要因. 発達心理学研究 2006; 17 (2): 182-192.
- 4) 高橋道子, 高橋真実. 親になることによる発達とそれに関わる要因. 東京学芸大学紀要総合教育科学系 2009; 60: 209-218.
- 5) 柏木恵子, 若松素子. 「親になる」ことによる人格発達: 生涯発達の視点から親を研究する試み. 発達心理学研究 1994; 5 (1): 72-83.
- 6) 尾形和男, 宮下一博. 父親と家族—夫婦関係に基づく妻の精神的ストレス, 幼児の社会性の発達及び夫自身の成長発達—. 千葉大学教育学部研究紀要 2000; 48: 1-14.
- 7) 福丸由佳. 乳幼児を持つ親の多重役割と抑うつ度との関連—父親を中心としたインタビューによる調査結果から—. 人間文化論叢 2000; 3: 133-143.
- 8) 石川洋子. 父親の子育てに対する意識の分析—自由記述による—. 文教大学女子短期大学部研究紀要 1992; 36: 61-67.
- 9) 目良秋子. 父親と母親の子育てによる人格発達. 発達研究 2001; 16: 87-98.
- 10) 小淵 恵, 高橋道子. 幼児を持つ夫婦の生活満足度—夫婦間相互サポートを含むソーシャル・サポートとの関連から—. 東京学芸大学紀要1部門 2002; 53: 47-56.
- 11) 小野寺敦子. 親になることによる自己概念の変化. 発達心理学研究 2003; 14 (2): 180-190.
- 12) 小野寺敦子, 柏木恵子. 親意識の形成過程に関する縦断研究. 発達研究 1997; 12: 59-78.

[Summary]

We carried out a questionnaire survey to investigate how “restriction of freedom” in the development process of becoming a father influenced the formation of awareness of parental roles. The survey showed that

about half of the respondents were feeling “restriction of freedom”. In the result of the analysis, the following factors were extracted ; four factors including “the past and a vision for the future”, “responsibility”, “restriction of freedom”, and “confidence as a father” for developmental scales to become a father ; two factors including “intimacy” and “stubbornness” for satisfaction scales of the husband and wife relationship ; a factor of “labor environment” for a workplace environment scale ; and a factor of “participation in child-rearing” for a scale of fathers’ participation in child-rearing. An investigation of

the relationship between the high-and low-level groups of “restriction of freedom” and those of other factors showed significant differences in all the factors. It was considered that fathers’ restriction of freedom was a factor having not only negative aspects but also supportive role in the development process of becoming a parent.

[Key words]

father, restriction of freedom, restriction feeling, parental roles, positive aspects